

トランプ豹変の論理

渡辺 久義

2017/04/27

トランプが大統領に選出されたとき、少なくともクリントンと彼との、本質的な違いのわかっている人々は、大いに興奮し、彼にどこまでのことができるか不安だとは言え、とにかく期待した。1月20日の就任演説では、(グローバリストに奪われた)ワシントンに人民の手を取り戻すと言い、今この時からすべての大殺戮(carnage)は終わると言った。それから3か月も経たない4月6日に、明らかにニセ旗とわかる、2日前の化学兵器事件を根拠に、彼がシリアへミサイルを撃ち込もうとは、誰も予想できなかった。これを愚かとか軽率だとして、トランプを責めるだけでは始まらない。これほどの変節大統領は、かつてなかったと呆れてみても始まらない。絶望して放棄するか？ それは最もやっていけないことである。

いろいろ文献を翻訳しているうちに、なぜこういうことが起こったかを、私はほぼ理解できるようになった。私の最新の翻訳文 <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170427.pdf> の訳者注にも書いたが、キーワードは、「ゆすり」「通過儀礼」それに「イスラエル」で、これらはすべて、アメリカ政府の根幹を動かしている犯罪に特有のものである。これらはまた「ピザゲイト」ともつながる。これも国家犯罪だからである(徳川政府の「踏み絵」=強制サタン行為に当たるだろう)。アメリカは、その基本政策が、不法に殺し奪い破壊し犯す、犯罪国家だから、それを運営する政治家も互いに犯罪でつながっている。

この論文に次のような文章が引用されている――

「ペドゲイト犯罪は、どんな政治家でも、彼らがすねに傷をもっていれば、ゆすったり賄賂を使ったりするのに使用することができる。たとえそんな傷はもたなくても、政治家は、犯罪者どものでっち上げる根拠によって、コントロールされる。CIA やモサドは常にこれをやっている。」

つまり、犯罪がいわば彼らの間の“潤滑油”のようなもので、正義を唱える異端児は、彼らの間ではやっていけず、もしそれをどこまでも通せば暗殺され、暗殺行為を咎める者はいない。政治家の経験のないトランプは、少なくとも選挙前は正義漢であった。彼は自らも他者からも、“泥沼の清掃”を期待されてホワイトハウスに乗り込んだ。しかしこの泥沼は内部に存在するものでなく、内部全体が泥沼であった。トランプが広大な泥沼に溺れかけているマン

がある。彼は、ホワイトハウス入りして短時間に、“学習”したに違いない——悪の世界では、悪の免許を取らないとやっていけない。命令を聞かせるためには、大統領として認めさせなければならず、そのためには、求められる大統領の資格を取らねばならない。——それが4月6日の理由なきシリア攻撃だったと考えられる。

これを非難するのは正しい。彼は（本来の、世界に尊敬される）大統領としての資格を、あの攻撃で完全に失ったと言ってもいいだろう。しかし、自分が悪人の仲間であることを証明しなければ、大統領として仕事ができないことも事実だった。だからトランプを単なる、臆病者、圧力に屈した情けない奴、として責めることもできないだろう。もう一つこの論文から孫引きしよう——

「すべての新しい大統領のための**通過儀礼**は、ならず者国家イスラエルのために行う、あからさまで間違えようのない戦争犯罪という仕事である。したがって、犯罪的なシリア攻撃をもって、この新しい大統領は、地位確保のためのバル・ミツバル（ユダヤ教の成人式）を済ませたのだと考えられる。」

一人前のアメリカ大統領になるためには、**イスラエル**のための中東（特にシリア）攻撃という戦争犯罪をやってみせることが必要だった。ここにイスラエルが、アメリカを支配する者、実は**ゆする者**として、一枚上手の犯罪者として出てくる。どうしてイスラエルのような小国が、大国アメリカを命令できるか？ それはゆする材料（ピザゲイト名簿など）をもっているからと考えられる。トランプにとって恐ろしいことは、そのイスラエルを背負って、ジャレド・クシュナーというシオニスト・ネオコンの若い“大物”が、彼の娘婿として彼の家庭に入ってきたことである。トランプにゆされる材料が、あるかないかは分からないが、なくても、ねつ造すると上に言っているから、同じことである。

クシュナーがどのように、想像できないほど巧妙にトランプ家族の一員となり、妻を介して父を改宗させたかは、この論文に詳しく書かれているが、世界を動かす闇の工作が、普通人の及ばぬ高い知能によって、組織的に家庭内で行われていることに、人は慄然とするだろう。クシュナーのハンサムで、一点の邪心もないかのような風貌が、恐ろしさを倍加する。ただ今後のシナリオは全くわからない。全く思いもかけない、恐ろしい展開をする可能性は十分にある。心理分析家も、トランプの「狂気」の「予測不能性」(unpredictability)を指摘している。彼もヒラリーのように悪霊にとりつかれ、男だけに何を仕出かすかわからない。

ただ一つ希望があるとすれば、あの4・6シリア爆撃事件は、アメリカの強さや恐ろしさよりも、アメリカ（や西洋世界全体）の愚かさを世界の人々に印象付け、その本質を象徴するものに見えたはずである。どんな悪知恵をもつ大国であろうと、良心も正気も失くした愚か

者は相手にされず、自滅していくよりほかない。この事件が起こるより前に、それを言った人がいる——アンドレ・ヴルチェク「西洋は相手にされなくなった：世界は笑っている（上、下）」 http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170406_1.pdf/
http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170406_2.pdf